

GR
白雲郷

とりお



47

埼玉 名栗

昭和55年 1月15日

宗教法人
白雲山

鳥居観音

表紙説明

白雲麓の梅林

駐車場から子育て蔵への山麓にある梅林は、

つつじにさきがけて咲き出します。

やがて、さくら、つつじと一緒にになってきれ

いです。庫裡も近いからお休み下さい。

とりゐ第47号目次

| | | |
|------------------|---------|----|
| 表紙 | 白雲山麓の梅林 | |
| 新年のごあいさつ | | |
| 開祖平沼先生 | ……… | 一 |
| 道光禪師御法話(其二十九) | ……… | 二 |
| 観音行の実践 光山善雄 | ……… | 五 |
| 西遊記(其の四〇) 岡部千三 | ……… | 八 |
| 田舎医者(其の二十六) 見川鯛山 | ……… | 一一 |
| 謹賀新年 | ……… | 十四 |
| 鳥居観音だより | ……… | 十五 |

昭和五十五年の新年に当つて

宗教法人 白雲山 鳥居観音

開祖 平 沼 桐

八十八歳

明けましておめでとうございます。

皆さまにおかれましては、御健勝で、新しい年をお迎えになったことと、心からおよろこび申し上げます。

さて、昨春秋、白雲山内に私の寿像建立に際しては、有縁多数の方から御支援を賜り、除幕式に際しましては、ご遠路且御多用中、多数御参列をいただき、好天にも恵まれ、盛大に挙式できましたことほまことに深く感激いたしております。

これは私が観音信仰を一途に、今日迄迄って来たそのお蔭だなア、と胸の中はいっぱいです。

数年前、一年間も病臥する身となりましたが、不思議な力が、病魔を静かに静かに消伏してくれているような感じを抱きました。

今はその思も数年の過去となりまして、本年は、米寿を迎えることになりました。

仏像の彫刻も、すでに完了しましたので、身心共に安楽で、今は筆をとっては達磨大師を描いたり、八十八才の歩みの編集にペンをとり、写真の選択などしながら発刊の日を夢みています。

毎月一、二回は、白雲山鳥居観音へ参拝して、山頂の救世大観音の妙想にふれ、堂宇内の諸仏それぞれの面輪に近づいて、私の指先に深い縁が結ばれていることなど考えて、親しみと敬けんの念を抱くことが何とも云えないよろこびであります。

新年祈禱の行事も年々盛んとなり、春秋二季の例法要はつつじと紅葉によるこばれております。

七月の盆に合せた塔婆施餓鬼、八月の流灯法要、花火、盆おどりは信心の皆様から期待されている行事となりました。

本年もご期待に添うべく一層努力いたします。何卒よろしくお願い申し上げます。

合掌



世 間

(其の二九)

世間、すなわち世の中ではありません。

「世間とは人の集合せる有様を指称せるものなり然れどもその集合せる人間は概して色声香味触法に迷い、自己の本来、空なることを知らずして、貪瞋痴の三毒に使役せられ、財色食名睡の五欲に執着して自ら其の非を覺らざるものなり。故に世間を度せんと思せば、先ず其執着する所を察して機先を制すべし。」

これは、この世の中は本来空の世界である。それなのにそこに集合している人間はみな、内は自我に執着し、外は色声香味触法に迷い、本来空であることを知らず、そのため貪瞋痴の三毒に苦しみ、財色

食名睡の五欲に執着して、自ら覺らないのが、世間の集まりだと云うのであります。

本来、仏心のなかに、この三毒といったような不純なものはありません。いつも申しますように、自己を満足するために掴みたいというのが、貪みたい求めたいというのが、貪欲心であります。これは自己を苦しめ、他人を禍いする毒素であります。

お経に諸苦の原因となるものは、貪欲であると説いてあります。故に仏は、これを捨てよとおっしゃるのですが、雲のごとく胸中に湧いてきて、なかなか捨てられない。こまった凡夫の内心作用であって自分を苦しめ、自分をほろぼすことになる、毒素の一つなのであります。しかるに、この世の中のことが、欲するとおりにことごとくが満足にいけばよいのですが、それが満足にいかない、今度は不平をおこす、腹を立てる、それが瞋恚の煩惱であります。

世の中はみなそうです。自分の思うようになればニコニコしていますが、思うようにならないと、

不平不満がこうじて、他人の命までうばうという、あさましい瞋恚の心に変化します。

それから愚痴でありますが、これはなにを愚痴というか、このごろの人はみな、慳巧ですが仏教では、おれがというこの捉われから眼のさめない者は、おれがみな愚痴であります。人間呼吸のかよって

これはみな愚痴であります。人間呼吸のかよって
いる間は、おれが、貴さまがと、親子兄弟の間でも衝突しています。あやまって他人が足をふんだとします。根性のわるい者は、きさまはおれの足をふんだなど、突きかかってきます。いやふんだわけではないが、粗相をしたのだから勘弁せよといっても、なかなか承知をしません。いやふんだ、というのでけんかをはじめます。これがみな、**「おれが」**……
「おれが」にとらわれているからであります。一つにも**「おれが」**二つにも**「おれが」**であります。

そんな**「おれが」**というのなら、自分が死んだら自分で思うように、始末していけばよかりそんなものだけに、息が切れたら、もう小指一本動かさせません。それでいて、**「おれが、おれが」**といっています。

す。

それが煩惱というものであります。このように食欲と、腹立て根性と愚痴と、この三つのものが心中の毒素となって、苦しんでいるのが凡夫というのであります。

それからつぎに五欲が説いてあります。これは財産の欲と、食欲と、名譽の欲と、それから睡眠欲、これは眼をふさいでねむるばかりでなく、懶惰（なまける）根性も意味するのであります。すなわち以上の上の三毒と、この財色食名睡の五欲が、心中に渦巻いて、苦しみあっているのが世間の集まりなのであります。

俗世間の人は、こういう毒にあてられていますから、これを治療する必要があります。そこでこれを経済する方法を、つぎに説明してありますが、それはしばらくあずかることにして、そういう世の中に立ちまじ。て、処していくところの心得を説いたのが、第七に話をしようとする「社交」という項目であります。それでその文に、

「社交とは世間に於ける関係を云う。世間に於ける関係は交易と感情なり」

とあります。これは実に要領を得ております。

なるほど世間の関係は、大別して考えれば、交易と感情の二つで、つくしております。故にこの二つを心得て社交に立っていけば、安全な要諦が得られると思ひます。そこで交易の説明をしています。

「交易とは有無相通じ、たがいに利益するをいう故に自己において、世間を益する所以のものを有せざれば世間に処して無礙自在なることあたわざるなり」

と、これはたとえば、十円もつていけば、十円のものを得られる。十円もたなければ得ることができないという。世の中が交換的なものであるから、交換をする材料を多くもつことが必要であります。精神的と云えば、やはりその意味において自己を修養しておく必要があります。自分に交換的なものをもたなければ、世間を益することができないのです。

世間を益することができなかつたら、世間に処し

て「自在たることあたわざるなり」であります。

だから世間を益する交換材料は、有形的にも無形的にも少しでも、世間に有益な材料をたくさん持つことが必要であります。

以下その例をあげてありますが、その第一が、職業で、

「職業、世間は交易なるを以つて、各渡世の業なきを得ざるものなり。故に宜しく世間に最も需要多き業務を撰び、之を以て世間を益すべし。世間を益する大なれば自己を益する亦大なり。

自他の益大なれば世間に処して自在なるべし。故に宜しく各其の分に安んじ徒らに妄想することなく専心其の業に精出すべし、然れども縁に應じて又能く移るべし。是れ即ち本来空の活動なり」

これは説明するまでもありません。ここに注意を要することは、人はいたずらに気うつりすることが一ばん悪い。どれほど他の人がしていることが好いといったからといって、あわてて自分がそれをやっていけるものではありませんから。(以下次号)

観音行の実践

兵庫 庫 泉

西正寺

光山

善雄

甘露の法雨

つづき

「諍ひ訴へられて官処を徑、車陣の中に怖畏ふいじんせんに彼の観音の力を念ずれば、衆もろろの怨怒あだこころ退散せん。妙音、観世音、梵音、海潮音、勝彼世間音を具し給う。是の故に須らく、常に念ずべし。念々に疑いを生ずること勿れ。観世音淨聖は苦惱死厄に於て、能く為に依怙と作りたまう、一切の功德を具し慈眼を以て衆生を視そなわせたまい、福聚ふくじゆの海無量なり、是の故に応に頂礼ちやうらいしたてまつるべし、」

「諍あらそい訴うたへられて官処を徑」とはよくある訴訟問題であります。色々の事件等で訴訟問題があつてもお互いが信仰に生きた人なら道德的にも話しあつて問題は片付くと思ひます。学者金持ち喧嘩けんかせずと申

しますから争えばどちらも損をいたします。勿論軍陣の中と申し、戦争の場合でも怖畏ふいじん心が起つても観音力を念ずれば怨敵退散おんてたいさんとありますが、吾々の心の中に勇氣を施無畏心を与えて下さるのが観音力であります。利害関係で争いとなつても、お互いが観音様を念ずるだけの信仰があればスラスラ問題は解決いたしましう。又国と国との紛争にしてもお互いに宗教的精神あらば相互の怨恨は解消するでしう。

「妙音、観世音、梵音、海潮音、勝彼世間音を具し給う」観音説法の音声おんぎよを讃仰さんぎやうされたもので五つの音声が出ています。松風の音、岸打つ波、水のさらさら流れる音も観音説法の御声と味わうことです。梵音とは清浄なる音で、すべての雑音がこの梵音のために浄化されます。海潮音とは海の潮に満干があるように観音説法にも千変万化があります。勝彼世間音とは世間の音声中一番に勝すぐれた音声であり、だからねてもさめても常に念ぜよ。観音さまを疑つては御利益はないわけです。天台大師は「観とは覺なり、覺とは仏なり、世音とは境なり、境即ち如来なり、

り」と解釈され、即ち観音とは、仏、如来と申すことであるが、衆生救済のため、正法明如来の位を下つて、菩薩となり、一切衆生が成仏する迄菩薩の位にあつて衆生を濟度教化するとあります。

吾々が苦惱死厄の災難に直面しても、観音さまはその人のために力となり、光りとなり、命となつて下さる、よく依怙えことなつて下さる、母の乳を赤子に与えても一切報酬を求めず、無条件にて愛の乳を施し下さるが慈眼視衆生であります。観音の体は慈悲智慧、勇猛であり、無量福德の政有者で大海の水が無量なる如く観音の大悲を海に喩たとえられたのです。

「爾その時に持地菩薩即ち座より起ちて前みて、仏に白まうして言まうさく、世尊、若し衆生有りて是の觀世音菩薩品の自在の業と普門示現の神通力とを聞かん者は当に知るべし、是の人の功德すくなからざること、を、仏、是の普門品を説き給ひし時、衆中八万四千の衆生、皆無等等なる阿耨多羅三藐三菩提心を発せり」とあります。

その時に持地菩薩即ち地藏菩薩が積尊の説法が終るや聴中の中より、立ち上つてすすんで積尊に申し、ていわく、世尊よ、若し衆生あつて、是の觀音さまの自由自在の業、七難三毒を消滅し二求兩願を満足せしめ、普門示現の神通力を聞き得た方は当に當るこの人の功德の拡大であることを。積尊がこの普門品をお説きになつた時は八万四千の衆生は皆無等等なる、阿耨多羅三藐三菩提心を発しました。無等々とは比べもののないことアノクタラとは無上、サンミヤクサンボダイとは正等正覚と云う意味であり、つまり積尊の説法を聞いて「心眼が開かれ、仏と同等の悟りを得たと云う意味であります。

本論も終りましたが、要は信心為本で觀音さまを信心することにより、心の支えとなり、強く明るく現代に生きぬくことができましょう。

時

「その時」 その時とは今であります。時は金なりと云い、時は一大事であります。朝起る時、働く

時、食う時、ねる時、みな時があります。春になる
と作物の種子を蒔く、秋は収穫の時がくる。種子を
蒔く時を失うては収穫はありません。農家はよく種
子をまく時を知り、また収穫の時を知っています。

朝起きにしても、午前二時頃よりごそごそされて
は安眠の妨害になるし、あまりおそく起きては病人
と間違えられる。朝食にしても七時に乗車出勤する
人は、七時に起きたでは間に合わない。六時までに
朝食をすませて出勤の準備せねばなりません。

教育をうけるにしても時があり、七十や八十にな
ってから学校に行ったところで効果は少ない。三才
の幼児に中学や高校のことを教えても頭に入らない
三才程度の幼児なら第一に保育所に入所させ、五才
ともなれば幼稚園に、幼稚園を終えたら小学校、中
学、高校、高校を卒業したら大学に四年行かなけれ
ば社会人とは云われない。

就職するまで二十年間も勉強せねばならないのが
日本の現状であります。

お嫁に行くにも時があり、三十、四十になってか

らではおそくて困ります。時を失うと初婚には落第
いたします。金儲けにも時があり、損をするにも時が
あります。時は今です。今をはずして怠けておつて
は時を失くし、よき機会をなくすことになります。

○

時に結婚の世話を頼まれて甲と乙とに見合いをさ
せることがあります。この初対面の時が一番大切
であります。相手の娘がどんな立派な衣服を着てお
りましても、不健康では話がなかなかまとまりませ
ん。お化粧した顔はきれいでも言葉が美しくなかつ
たら合格はむづかしい。

縁あって結婚しましたが、一年も立ちますと両方
の欠点が見えてきます。かかる時は長所を発見して
欠点を美化することです。また初対面の時を思い出
すことです。船が出航するとき、始め天気でも沖に
でると荒波や台風で遭難することがあります。始め
は平安でも日がたつと愚痴が出る、欲が出る、怒り
が出る。特に子供を恵まれない家庭は淋しいです。

(以下次号)



西遊記

(其の四〇)

岡部千三

天 竺 つづき

三つのすず

国王のしずんだようすを見ると、悟空は、じっとしていられなくなった。

「やあそれはおこまりでしょう。わたしがひとつやってみましょう。ひとつとらえてぎゅっというめにあわせてやります。」

きんと雲をよびよせるや、ひらりとそれにのって賽太歳のいるほら穴へおしかけていった。ところがほら穴からは、まっかな火がふきだし、砂がとび、目もあけられないありさまだ。

悟空はすがたをかえて、一羽のたかになり、けむりの中をくぐってすすんでいくと、賽太歳のてしたらしい男が小さな箱を持って、えっさえっささと走っ

てくるのであった。

「おう、きょうだい。」

悟空は、もとのすがたになって、したしそうに、そばへよってたずねた。

「いそいでいるようだね、どこへいくのだ。」

「いそぎもいそぎ、大いそぎ。朱紫国へ手紙をとどけにいくところだよ。これから大軍でせめていって、国王はじめ、みなごろしにする。いやなら、こうさんしろ、というわけさ。その手紙が、これだ」
てしたがとくいになって云うのを聞いた悟空は、いきなり如意棒でたおし、手紙をうばった。

「かわいそうだがしかたがない。わたしをうらむな。わるいのは、おまえの主人の賽太歳だ。うらむなら、賽太歳をうらめ。」

悟空は城へもどって、うばった手紙を国王に見せた。

「これから賽太歳のところへいき、金聖宮をとりもどしてきます。ついては、なにか、しょうこになる品をください。」

「ではこれを。」

国王は、けらいの者にいつけて、くらの中から金のうちわを持ってこさせて、云った。

「これは金聖宮の大切な宝だ、これを持って行けば、わたしからの使いと云うことがわかるう。」

「では、ひと走り、行ってきます。」

悟空は、また賽太蔵のほら穴へとんで行った。

悟空は、てしたのすがたになりすまして、火をくぐり、けむりをわけて、賽太蔵に近づいた。

「ただいま、朱紫国からもどりました。お手紙はたしかにわたしてまいりました。」

「ごくろう。ところで、こちらのようすは。」

「はい。兵隊や馬を並べて、いくさのよういをしております。」

「いくさのよういだって……」

賽太蔵は、おこって、まっかになった。

「なまいきな朱紫国王め。そのつもりなら、朱紫国の城へ火をかけて、王もけらいも、むしやきにしてしまえ」とおもてへでて、兵士をよんだ。

そのすきに、悟空は、おくへいって、金聖宮をみつけた。金のうでわを見せて、

「たすけにきたから、泣くのはよしな、だが、あのものすごい火とけむり、おまけに砂のふるのがじやまだ、いったい、あれはなにか……知っているかね。」と云った。

「はい。あれは賽太蔵の宝もの、三つのすずのしわざです。だい一のすずは三百丈の火をふきます。だい二のすずは三百丈のけむりをふき、だい三のけむりは三百丈の砂をふいて、人のいのちをとることができるときいています。」

「では、そのすずをとりあげてしまおう。」と悟空は、金聖宮にはかりごとをさすけた。

悟空にいいふくめられた金聖宮がおくのへやにはいっていくと、ちょうど賽太蔵は酒をのんでいた。

金聖宮は、わざとにこにこして、賽太蔵に酒をすすめ、よったところで、

「宝のすずは、わたしがあずかりましよう。と、賽太蔵から、すずをうけとって、じぶんのへや

のたなの上のせておいた。

そこへ悟空が、こっそりはいつていった。

「いまのうちだ、気のつかないうちに、もらつていこう。」

悟空が、すずをとろうとして手をかけると、チリン。すずはひとりになりだした。

「やっ、すずぬす人が、かくごいたせ」

よっていても賽太歳は、鉄棒をとつて、ぱつととびだし、悟空にうちかかってきた。

正 体

それといっしょに、火とけむりと砂がどどつとふきつけてきた。悟空は、わざとにげたようにみせかけておいて一匹のはえになり、さわぎにまぎれて、ほら穴のおくへひきかえした。

賽太歳は、やれやれといったようである。

「さるが、二度とはいれぬように、しっかりと門をしめておけ」と、てしたにいつけた。

ところが、はえになつてゐる悟空は、金聖宮のあたまとまっていた。

「金聖宮さん、わたしはここにいますよ。しかしあなたがあらわすと、ばけものがさわぎだしますから、だれか、おそばぎの侍女にばけたいのですがだれがいいでしょうね。」

「それなら、わたしの見はりをしている召使いの女になつてください。」

金聖宮は、手をたたいて、見はりの召使を呼んだ召使が、しゃなりしゃなりとはいつてくるのを……悟空は、

「えいっ。」と、一うちにうちたおし、かわりに、すぐ、召使になつてしまった。

そこへ、賽太歳がやつてきた。着物をぬいで、あせをふいているすきに、悟空は三つの宝のすずを、じぶんの毛でつくつたにせのとかえ、ほんものを、持つておもてへとびだした。

「やーい、ばけものの賽太歳、金聖宮をかえせ」

「うるさいやつだ、ほうつておけ、中へはいれなければなにもできはしない。」

賽太歳はつかれていたので、いくさどころではない



田舎医者(其の二十六)

見川 鯛山

檻 つづく

引金に指がかかった。瞬間、犬殺しの腰がくだけ
へナへナと地面へ坐った。

「さっ、立て!! なんだそのざまは!!」

「カンベンだア、俺なんにも悪くねえだ。俺のせ
えでねえだつてばさア、俺、殺されたくねえだア、
俺みんな、命令でやらされてるだけなんだからよ
オ」と泣いた。

「悪い命令だ!! どうしてそんな命令くだすだ。

天皇陛下さんの氣持、俺にアわかんねっ。俺いつだ
つて天皇陛下こと尊敬してるだぞ。跡取り息子ア戦
で命まで掃げてるだ、だが俺アちっとも怨んじヤア
いねえど。いまだつて俺ア、天皇陛下さんの写真か

ざつとくだぞ、陛下さんが御用邸さおいでんとき

ア、俺家の前の道を自動車で通りなざるだ。だから
そのたんびに日の丸の旗出して、俺ア最敬礼して見
送ってるだ。らちのクロだつておんなじだぞ、あい
つアな、陛下さんの行列くつと、すみっこの方さ逃
げちまうだぞ。一度だつて吠えたりしたことあつか
よう!! だのにどうしてクロこと殺さねばなんねえ
だ? 俺の伴だけじゃア、まだ足んねえちゅうのか
それじゃあんまりだべ、なアみんな」

と、母ちゃんがまた野次馬に云った。

「犬のこたア陛下様が悪いんじアねえど、保健所
が悪いだ!!」

誰かがいった。

すると、口惜しがって母ちゃんが訊いた。

「そんだったら、散歩の話はどうなんだ？」

天皇陛下さんがお散歩なさるときア、俺達みんなその道から追っばらわれるべ。な、そうだんべ？

「そのことだつて陛下さんがそんな無理いうはずねえだ。みんな家来たちがそうするだ」

と、またさっきの人がいった。

「悪い家来どもだ!! そんな奴アみんな、クビにしちめえはいいだに!!」

母ちゃんの怒りが、宮内庁の方へ引っ越すと、もう犬殺しには寛大だった。

「あんたは勘弁してやっぺ。だから、うちのクロを返してよこしなせえ」

「ああ、そうすつともサ。だけど罰金だけア払つてもらおうど」

「ば、ば、ばつ金だと?」

再び、母ちゃんの髪の毛がさか立った。

「このやろっ!! ひと様の犬盗んでおいて、その上罰金払えつてぬかしアがるのか!!」

母ちゃんがさかさまに鉄砲ふりあげると、頭と顔

を両手でとおおい、逃げ腰になって犬殺しが言った。

「そりゃそうだともさ、一頭につき三百円が規定だぞ。俺たちの手当だ」

「なんだと? オメエらの手当だア? なアるほどそんで分つた、オメエら、ンだから飼い主のある犬べえとつつかまえてただナ、野良犬じゃ一文にもなんねえもんだから、そこでこん畜生め、意地のきたねえ奴めらが!!」

と、大上段に振りかぶつた鉄砲の台尻で、あわや犬殺しの脳天を粉みじんにたたきわらんばかりの剣幕だった。

それを見て、犬殺しが母ちゃんの足もとで尻餅をつき、目をつぶつて断末魔の悲鳴をあげた。

間一髪、カラカラと役場の窓が開いて、そこから大声で言った。

「一寸待てっ!! 犬は返してやつつオ、全部ただいいぞオ、今日はオールサービスだア!!」

見ると、それは役場の助役さんだった。彼は犬殺しを招き、何かこそそ耳うちをした。

やがてその窓から帰ってきた犬殺しは母ちゃんの顔だけ見ないで、あとのみんなに云った。

「助役さんがせっかくああ云うだ。だから俺ア、きようのところア黙って帰える。だがこん次ア駄目だぞ、誰がなんてったって犬ア返さねえぞ。職務は職務だ、俺命とられたって平気だ、俺だって男だ。その気になりや、何だって、おっかねくねえだかな!!」

犬殺しが、小型トラックの金網をあけると、そこから犬が何匹もとびだしてきた。真つ光の、一番ずう体のでかい奴は、私の犬だった。

「おっ?なんだおまえ、また掴まってたのかっも何度目だコイツ」私が云うと、犬が私の足もとで恥ずかしそうにうづくまった。

おしまいに「那須バーバー」の黒い犬が出てきたもうかなりの年寄りで、トラックからとび下りるとパタッと音をたてて地面に腹を打った。腰がよぼよぼしているのだ。

見世物があっけなく暮になり、野次馬が散っていた。祭りの終ったあとみたいにガランとしたその広っぱは、もう、すっかり葉桜が茂り、そこかしこで洗丁花が甘酸っぱく匂った。

サーピスの犬をそれぞれ貰い下げて、私は床屋の夫婦と一緒に帰った。

「さっきは凄いい剣幕だったナ。はらはらしていたよ。」私が母ちゃんに云うと、

「ンだ。こいつ怒っと、いつもあなるだ。だから俺とっても……」

鉄砲をかついだ父ちゃんがそこまで云ったら、じろっと母ちゃんが睨んで、たちまち彼を黙らせてしまった。だから私も、もうなんにも云わない方がよさそうだ。

突然、私達の耳もとで、ダーンと鉄砲がデカイ音で鳴った。歩きながらどこかいじりまわしてた父ちゃんが暴発させたのだった。

その音で、「那須バーバー」の母ちゃんが、あっけなくその場に気絶した。

以下次号

謹賀新年 一九八〇年



| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|-------------|------------|------------|------------|------|-------|
| 川越 | 川越 | 青梅 | 東京 | 飯能 | 川口 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | 大宮 | 名栗 | 名栗 | 東京 | 東京 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | | |
| 原全 田愛助 | 齊全 藤恒作 | 小全 峰久治 | 若全 林とく | 梶役 谷真一 | 飯持 塚孝司 | 町全 田眞之亮 | 有全 馬忠直 | 尾全 尻天外 | 平全 沼康彦 | 岡代 部千三 | 平全 沼宏之 | 鷺全 見保佑 | 渡全 辺綱雄 | 平全 沼とみ | 平全 沼弥太郎 | 平全 沼弥太郎 | | |
| 羽村 | 飯能 | 飯能 | 飯能 | 所沢 | 狭山 | 与野 | 川越 | 飯能 | 名栗 | 飯能 | 所沢 | 狭山 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | | |
| 青梅 宮沢実子生 | 野口 定吉 | 横川 一郎 | 武居 藤吉 | 所沢 山権三 | 井上 竹吉 | 梶山 谷真一 | 原越 田真一 | 武全 居藤吉 | 平全 沼幸一 | 水全 上清 | 小全 山権之丞 | 井全 上竹吉 | 枝全 久保鶴四郎 | 吉全 田仙太郎 | 町全 田仲太郎 | 町全 田仲太郎 | | |
| 入間市 | 東京 | 東京 | 飯能 | 東京 | 東京 | 東京 | 東京 | 朝霞 | 東京 | 東京 | 東京 | 青梅 | 青梅 | 五日市 | 浦和 | 東松山 | 秩父 | 秩父 |
| 粕谷達二 | 山崎完 | 内田桂一郎 | 平沼玉枝 | 平沼杉之助 | 本村その | 滝田トキ | 田辺さわ | 広瀬秀雄 | 江端政吉 | 若林とく | 榎本みや子 | 荒井もと | 小峰久治 | 鈴木嘉三 | 藤和沢帝 | 中里勇吉 | 小池清 | 杉本忠太郎 |
| 名栗 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | 名栗 | 比企 | 坂戸 | 越生 | 越生 | 葉山 | 東京 | 飯能 | 入間 | 東京 | 飯能 | 東京 |
| 浅見達次郎 | 杉下愛吉 | 佐野正助 | 矢島武一 | 岡部仲次郎 | 岡部敏 | 野本栄治 | 岡部安一 | 関口喜作 | 若松正数 | 小森茂 | 畑く | 永井頼信 | 吉崎弘 | 渋谷文造 | 吉田健 | 国府方金圭 | 小川文雄 | 江崎元堂 |

鳥居観音だより

終った行事と参拝状況

十月五日、マイカーで神奈川から来たと云う人が十五人秩父へ行く途中参拝、青梅から新しくできた小沢トンネルを通って来たと云う。便利になったねこれアいい所だ。遠くからちらっと、山の上に大きな観音さまが見えたので、まだ秩父にしてはおかしいが、「そうだ思い出した、青梅から来る途中に、トンネルを下りて来ての突きあたりに、あった観音さまの看板が、」……ここが、名栗村だ。

この観音さまは、一里もさきから見えたのだ。本堂に行かれて、七観音を拝んだり、附近の状況をよくながめながら、口々にいい所だ、又改めて、来ますよ、これから秩父へ行くので、その通り途でこんなよい観音を拝むことができてありがたかったと云ってよろこばれた。小沢トンネルのおかげだ。

八王子方面―横浜―立川―青梅―方面からの人々は便利になった、と云っておられる。

開祖桐江先生寿像建立地附近の整地と花木等の植付のため、鈴木師来山、職員手伝う。

丁度植栽の適季なので都合がよい。

つつじ、さつき、椿、もくせい、手ぎわよく、植えつけられて行った。

一方山門が出来上って、色の吹きつけがなされた山門につづいての入口附近及び参道わきに石を置く設計が行われた。

置石は皆自然石で、その間々に花木をうえ込む予定である。

十月十日参道大灯ろうのぬり替着手、四十五基の大灯ろうが、ぬり替られると、うつくしくなる。

寿像除幕式には間に合う予定。

十月十三日 本堂前石段の泥を洗う。参拝者多し
藤棚の新芽剪定、整枝、

山門完成して、色彩の吹きつけが行われた。機械でやるので見る見るうちにきれいに吹

きつけられた。附近もおちついた感じになった。

十月十五日 例年なら紅葉も始まるのだが、本年はまだその気配もない、気候が一般におくれていると云われているためであろう。

参拝客も多くなつて来た。

十月二十日山門からおくへ椿、つつじ等の植付が完了した、駐車場の広場からすっかり整つた。

十月二十五日紅葉は救世観音附近と、玄奘三蔵塔の附近が色づいて来た。一日一日とうつくしくなる、参拝者と、紅葉を探勝客が多くなる。

十月二十七日 午後一時 地元役員会

平沼先生寿像除幕式の準備のため地元役員の会議を開催、担当の係を決め、当日の記念品の引換の方法処理方について話し、三時散会す。

平沼先生ご夫妻来山、直ちに救世大観音へ上られ深み行く白雲山の秋を探勝された。

近づいた寿像除幕式の準備等ごらんになって、よるこんでおられた。

本堂参拝されて、三時半お帰りになつた。

小春日和に重なつた慶祝行事

十一月三日 文化の日 山門落慶式、開山四十年記念式、秋季例法要、開祖平沼先生ご夫妻寿像除幕式のお目出度い行事が修行された。

山門落慶式

本日の導師は
鶴見総持寺監院
松浦英文老師に
よつて修行され
た。

十時三十分、
平沼邸を上所
として、当山
の尾尻老師の
先導によつて、
名栗梅花講婦



(平沼邸から式場へ行列)

人の奉詠和讃行
進が始められた。

つづいて先導

された老師の、

中央に導師松浦

英文老師が静か

に歩を進められ

その後に開祖平

沼先生ご夫妻が

足を運ばれた。

風もない小春

日和の文化の

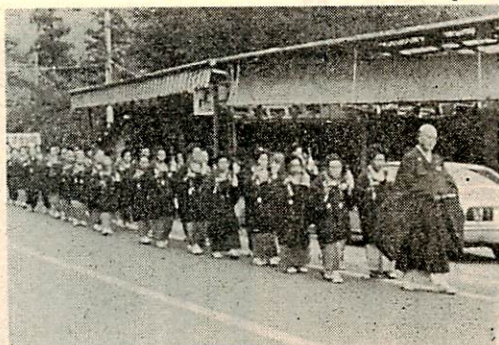
日、何とも云

えないよい日だねえ、と参列の人々口々に云ってお

られた。

行列は山門前の駐車場受付前に進められて歩行は
とまった。

山門には紅白のテープが両柱に結ばれて中央には
リボンがついてその両側に鉄が入られる仕組に、



(行列の先頭)

ピンと張られていた。

山門入口で導師松浦老師は慶祝法文をお読みにな
って、平沼先生と並ばれて鉄を手にされてテープを
切られた。

この瞬間花火が打ち上げられ、その音は谷にこだ
ました。花火は続いて打ち上げられ、行列は山門を
入って、参道を進んだ。

参列に居並ぶ人等数百となつて、その列が本堂へ
と進まれた。

山門の額は

松浦老師の染

筆で、発心と

書かれて、小

春の陽にうき

出された。

山門建立に

よつて、入口

が一そうおご

そかになった。



(山門のテープを切られる)

山門から本堂
前まで、新らし
い砂利がしかれ
て、くつの音が
高鳴った。

先生ご夫妻に
ついて、参列
者が行列をつく
って本堂前や、
広場にお集りに
なって次の法要
をお待ちになっ
た。

献灯式、開山四十年記念法要

十時四十分 参道大灯ろう献灯式が、紅白テープ
で飾られた手しょくに火を点じて、しょく台のろう
そくに灯がつけられ、献灯の法文が読まれて、四十
五灯の参道大灯ろうに献灯の式が修行された。



献灯式につづいて、当山開山四十年記念法要が行
われ、堂の内外に於て焼香がなされた。

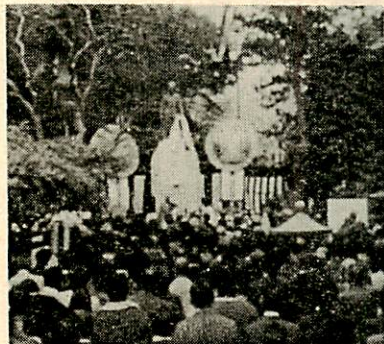
本堂内の正面の本尊聖観音始め六観音の面ざしは
又格別に拝され、供物供華が人の目を引いた。

開祖平沼先生ご夫妻寿像除幕式

十一時三十分 予定通り除幕式となる。
本堂前の広場に式場が準備された。

寿像には白布がかけられ、向って右が先生の寿像
左がとみ夫人の
寿像である。

周囲には紅白
の幕が張られ、
前兩わきに寿の
大花輪が二つ立
って、祭だんに
は生花、供物が
うつくしく飾ら
れていた。



(多数の参列者)

岡部代表からあ
って、除幕とな
る。

白布に結ばれ
た紅白のひもを
平沼先生のひ
こ孫けい子さん
とつね夫くん二
人によって、除
幕された。



(除幕)

広い場内も人
で一ぱいである
梅花講の慶祝
和讃があると、
開祖先生ご夫妻
のお着席と
導師入場、
開式のことばが



拍子がわく、
この時、花火
がつづいて打ち
上げられ、空に
とどろいた。

導師松浦老師
のごすい示に、
世界にも例を見
ないものをおつ
くりになったと
強く感じられた
お言葉をうかが
って、参列各位
も感深くされて
いた。

寿像を拜するに、先生自ら腰に鉈、手に鎌を持た
れて山内の整備と木々の撫育に、四十年をかけての
開拓指導と、自ら仏彫に精魂を打ち込んで、数々の
観音を作られたことは、何人にもできない仕業であ



る。

つづいて表彰状、感謝状の贈呈があった後、来賓代表で、松田江畔先生から祝辞をいただいた。

松田先生は、平沼先生ご夫妻とは開山さされてから間もなく親しくなされて、書を通じ、又、協力者だった水野梅暁老師とも大変心やすく信頼されておられ、当山のことに ついては実によくご存じで、それだけに厚いご協力を いただいておりますので、お祝いのおことはもよくう がってのをおのべいたたいて、先生のお仕事の 威大さをおうかがうことができた。



(示すのご老師浦松)

最後に開祖平沼先生から親しくごあいさつを いただいた。

お言葉の中に奥様の細かいところのご協力があ ったことをおっしゃられたので、夫唱婦随とはこのこ とだと、一同感激を新たになさっていた。…… 一同感激のうちに、代表の閉式のあいさつがあっ て無事行事が終了した。

全日本仏教婦人連盟二十六回大会開催

十一月八日 第一回 十一時本堂に於て物故者二 十名の法要が、当山専任尾尻老師、有馬、鯨井の二 老師によって修行された。

参列の方達は、何れも連盟で、有名なお方で、理 事長山本杉、事務局長船口暉子、理事平沼とみ、山 口貴美子外三十数名の方達で、遠くは大阪、名古屋 仙台等から来山されていた。

東京からは近いと云っても、当山は乗物はバス路 線による以外タクシー位のもので、不便な所をよる こんでお選び下さったことは、ありがたかった。

法要後は観世音センターにお入りになって諸般の議事があり、いろいろと懇談もあった。

十一月九日 第二日 六時起床、七時から本堂で座禅会があった。

座禅指導は当山の尾尻老師が、修行を通して体験心から指導に当られた。

座禅会は通して一時間あったが、後半の講話は又人々の心をうつお話で、母への恩愛が如何に深いものかのお話だった。

本堂には四十年前、お母さんの遺言によって開祖平沼先生が

彫刻された、本尊の聖観音が、列席の方達を慈悲のまなざしで、ほほ笑みかけておられた。



午前中はそれぞれに、白雲山中に登って、秋の深い山々のいろどりを探勝しながら、又文庫にも入って陳列の珍しいものに興を深められた。

午後一時から観世音センターの広間で、佐々木久子さんの講演があった。

おもしろく、身振り手振りで、現代社会の出来ごとの生なまのものを話されたので、心に感じたものが多くて時間のたつのも知らなかった。

講演が終了した後、尚今後の計画方針等の話し合いがあつて夜おそく散会された。

同 午前十一時東京練馬の老人会の方々二十数名来山、山内探勝、庫裡での懇談にはいつものように花が咲いた。

この方達は毎年来山されるので気やすくさせていたでいるので当山ではたのしい位である。

紅葉が盛りとなって来たのでその他の参拝も多くなつて来た。

新年の祈禱の御案内を準備、
絵馬の作成の準備に着手。

十一月十五日 十二時松田江畔先生が、水野梅暁老師の碑文をトラックに積んで、石屋さんを案内して、遠く清水市から到着された。

丁度七時に出発されたとのこと、五時間で来られるとはおどろいたのである。

中食をとられて、すぐ山の玄奘三蔵塔の前の広場に荷をおろして、やがて清水へ折返された。

やがてこの碑がこの広場に建立されることになる

十一月十八日 十一時 大和拓友会役員会と植樹祭が執行された。

大和拓友会の碑の所に五葉の松が添え植された。このため一そう石碑が引立った。

尚ほたん桜、そめい吉野桜各三十本も山のふもとに植栽された。

その後食事懇談会があつて、当時の隊長だった、秩父荒川村から来られた久保元隊長のあいさつがあつて、和やかに四方山の話から北満で開拓した話まで出て夕刻迄すごされた。

十四才で渡満開拓した人も今五十五才位である。

十一月二十日 名栗老人会全員紅葉探勝入山。

十一月二十六日 開祖平沼先生ご夫妻最後の紅葉を採勝さる 紅葉がお待ちしていたようにうつくしく山を染めていた。

新年祈禱のご案内を発送。

十二月一日 十二時、朝霞市、広瀬電機株式会社社長引率によって、社員百名研修来山、直ちに参堂尾尻老師によって、祈禱が修行され、次いで講話を熱心にお聞きになった。

ご一行は庫裡で食事の後、三時半二台のバスに分乗帰途につかれた。

十二月三日 除幕式の記念品未送の分全部配送。

新年祈禱の受付着手、帳簿記入開始。

大黒殿から大黒様を本堂へおうつした。

十時尾尻老師に遷座の読経を修行していただいて職員が奉持下山本堂内に無事遷座終了す。

十二月三十一日 午後十一時三十分 本堂で除夜の法要、次いで十二時から鐘楼に参り、除夜の鐘、百八を来山の方についていただいた。

新年祈禱 昭和五十五年

一月一日 十時から、元旦祈禱が、恒例によって本堂に於て尾尻、有馬、鯨井三老師によって二千余に上る祈禱が修行された。

朝から晴着姿の参拝者が次ぎ次ぎ来山、本堂前はにぎわった。

おみくじを引く人達、破魔矢を買う人などで正月風景がくりひろげられた。

祈禱に参列した人は、庫裡で新年の宴が開かれて四方山の話に花が咲いた。

いつも三日迄参拝者が見えてにぎわった。

一月十五日 祈禱をされる客もあり、成人式なので、成人式に参列した若い人達が、参拝に見えた。

鐘楼からは、鐘がつかれ、冬空に余韻を引いて消えて行った。

年末まで暖かだったので、あたりの木々の芽がいろづいてふくらんでいる。

寛の水の音も、和らいできこえる。

これからの行事と花のお知らせ

二月三日 節分会、毎年午後二時から、山上の、救世観音から豆を撒いて下山する。本堂は三時頃に。用意した福豆を参拝者にさし上げる。

花は沈丁花がふくらんでくる。

本堂うらの椿の花が年末からポツポツ咲きつづけているので山内は椿の花にたのしさがわく。

三月二十二日

午後一時、春の

彼岸法要、

山内に梅の花

がちらちら、咲

き出して、鶯が

鳴いてくる。

椿の花が咲い

ている。竹林の

中に、だるま大

師のあたりに、



暑さ寒さも彼岸まで、とは昔からよく云われてい
るのに気がつく頃となる。

梅のお知らせ。

三月中旬に咲き始めて四月中旬まで、

さくら

四月上旬からそめい吉野が咲き、あとから山ざく

らとなる。

つつじ

四月上旬からみつばつつじが山内一面に咲き出し

て、絵の中にいるかと思うようになる。

全山が百花にいろどられ、自然と雄大な自然のう

つくしさに心が引かれる。

百花りよらんの一ヶ月があります。

春季例法要

四月十七日、十時から、例年通り修行する。

花の中、若葉の中に、祭り幟りが立ち、飾り提灯

がかかり、俳句の短冊が風にゆれている。

木々の芽がそれぞれの色を出して、山を飾るかの

ように見えて、うっとりとする。

秋 雑 詠

除幕せる 寿像を慕う 秋の人 千昭

文化の日 寿像除幕に 出会いけり 千昭

菊香る 中に寿像の 除幕式 倫一郎

開山の 四十年とや 菊香る 松次

紅葉は 白雲山頂 真盛り 敏子

参詣は 白雲山の 紅葉から 忠雄

石仏の ひざをかくして草紅葉 静江

香煙は ゆるく流れて 秋空へ 正春

鐘つけば 余韻は 秋の嶺に消えぬ 保太郎

観音の み手に一ひら 散る紅葉 芳次郎

仁王坂 松が枝渡る 秋の風 滴水

紅葉の 霊山見返りつ おしみつつ 霞山

参道に 散りしく紅葉 おしみ踏む 秋月

とりの 第四十七号 発行日 昭和五十五年一月一五日

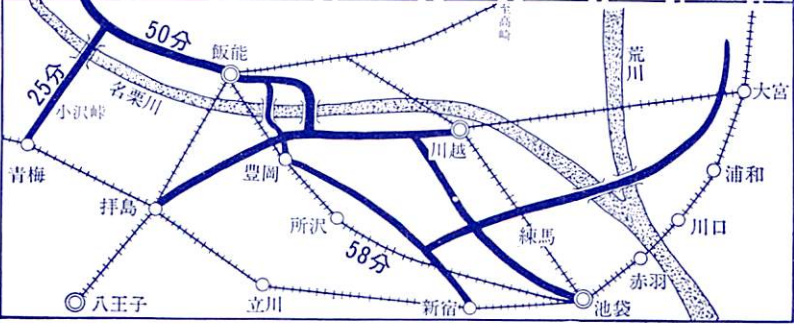
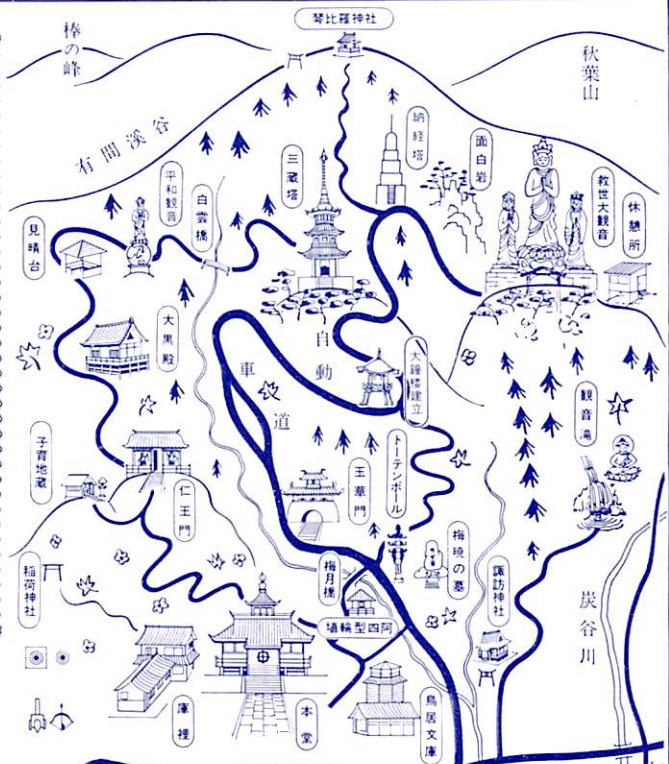
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三

発行人 浦和市仲町二一八—十五 武州印刷株式会社

印刷所 鳥居観音 電話 ○四二九七—九—〇四一七

白雲山

鳥居観音
観世音センター案内図



春の行事

●新年祈禱

1月1日－10時～1月3日まで

●小正月祈禱

1月15日－10時

●春彼岸法要

3月21日－10時

花のお知らせと法要

●梅 3月下旬

●さくら 4月上旬

●つつじまつり 4月1日－5月末

●春の例法要

4月17日 10時30分 本堂

11時30分 救世観音